

## 中村地平「女たち」論

阮 文 雅

徵用作家としてマレー半島に派遣された中村地平は、昭和十七年十二月、一年ぶりに日本に帰還した。そして昭和十九年、空襲を避けるため、新婚の妻と生まれたばかりの娘を連れて宮崎の実家へ疎開した。その後は、郷里宮崎に残って県立図書館長を務めながら地方文化の向上に尽くして、東京での執筆活動に復帰することはなかった。

それゆえか、中村地平の戦後の作品については、作品に描かれている風土との関連は研究されないまま、ひたすら「私小説」として読まれてきた。戦前の「南国的な明るさをもつ浪漫的な」作風<sup>1</sup>に対して、戦後の作品は「風土からぬげだし」、中村地平は「私小説家的リアリストに脱皮<sup>3</sup>」したと見なされている。

それでは、実際の中村地平の戦後作品はどうなっているのであろうか。昭和二十三年三月に『中央公論』に発表された「女たち」は、戦後の地方を舞台にして、地方の女性に焦点

を当てて描いた短編小説である。この作品はこれまで研究対象とされてこなかったが、作品の発表時期から見れば、昭和二十三年一月に地平が咯血した<sup>4</sup>直後の療養生活の中で腐心して執筆した作品だと推測できる。

浅見淵氏は、『中村地平全集』の「解説」において、中村地平から聞いたクアラルンプールの町の話とマノン<sup>5</sup>の話詳しく紹介し、以下のように述べている。

作者はシンガポールに駐屯したのち、クアラルンプールに配属されている。ここは現在独立国となったマレーシアの首都として今や有名だが、なかなか美しい町だそうである。(略)この町での生活は従軍中最も快適だったという。また、この時、インドネシアのマノン<sup>6</sup>の話もさんざん聞かされた。レブラの噂の話も。筆者も戦争末期に海軍報道班員としてマニラに赴いたので、士官

たちの慰安所の在り方を多少知っているが、豪華な邸宅を軍が接収してそれに当てていた上に、労賃が安いので使用人を大勢使っていたので清潔であり、また戦争インフレで大抵の現地人が生活に困窮していたので割りに美人が集っていた。クアラルンプールでも同然だったろう。

そして、浅見淵氏は、「この小説の主題は」、中村地平が「マライに陸軍報道班員として従軍中に経験したもの」と考えた。なぜなら、「戦後の混乱を極めているわが国の地方都市を額縁にして、戦争のため心情が荒廃してニヒルになってしまっている戦場からの帰還青年を拉し来たり、その思い出として描いているので、"インドネシアのマノン"の艶めかしい媚態がいつそう印象的に浮かびあがっている」からである。また、「主人公の画学生あがりの青年の同棲生活に対する絶望には、作者のかつての愛欲地獄に落ち込んだ時の実体験が裏づけされている」と述べ、「この作品には」「作者自身の青春の挽歌めいたもの」があるとの見解を示している。この「愛欲地獄」の実体験というのは、いうまでもなく、当時の文壇で大いに噂が立っていた地平と真杉静枝との同棲生活を指しているのであろう。

興梶秀樹氏もまた浅見淵氏の私小説的な読みを踏まえて、勝子も久子も、「真杉静枝をモデルにした」と、「中村地平小

説集」の「作品解説」で説明し、さらに以下のように述べた。

それにしてもマノンの描写はあまりにも魅惑的である。まるで映画の一場面をみるかのような桃源境の別世界は、戦いの中で、つかの間の生命に与えられた至福の時間であり、現地除隊になってマノンと一緒になろうと夢想するまでにマノンの肉体に溺れてゆく輝くような青春の描写のすばらしさは読んでもらうより仕方がない。中村地平は友人達にさんざんマノンの話をしていたそうだから、幾度となく繰り返し思い返し、言葉を紡いだのであつたらう。

このように、「女たち」は、中村地平がマライでの慰安所体験と真杉静枝との同棲体験とを素材に「青春」の思い出を記述した小説だと位置づけられてきた。しかしながら、地平の実体験を下敷きにして執筆した作品という理由で「私小説」として解釈し、そこから彼の戦前と戦後作品の作風の転換を見出すならば、大いに疑問がある。地平の戦前作品でも自身の青春体験を下敷きにする傾向があつたからである。

また、敗戦後の町の頹廃ぶりと敗戦によって不幸な環境に落とされた人々の泥沼の関係とが作中においてしばしば強調されるといふ点を考慮に入れるならば、この小説が、地平と

真杉静枝、あるいはマノンとのつき合い体験を下敷きにして「青春」を記述したものであったのかどうかも疑問となる。これは単なる作品の表面から捉えた結論かもしれない。

この作品は「女たち」を題名に掲げ、戦後の地方女性を描くことよって、地平の地方、あるいは敗戦に対する意識が端的に表されているものだと考えられる。そこで、本稿では、中村地平の戦後作品と戦前作品における南方女性像の異同を検証するために、「女たち」を一つの手がかりとして考察する。

## 一

「女たち」に描かれているのは、マライから復員して南方の町に帰ってきた「僕」と女性との交際である。「僕」は戦後になって仕事もなく、麻雀屋で出会った勝子と同棲して、勝子の手によって養われている。しかし、「僕」の勝子への愛情はだんだん消えはじめている。マライの慰安所で知り合った、ハンセン病に罹ったマノンと似ている勝子の寝顔を見たのが原因である。また、未亡人としての勝子が、夫の遺骨を抱いて夜中に泣いていたのを見たのも原因の一つである。それでも勝子から離れることができない「僕」は、やがて勝子が経営する古本屋の店員である久子と体の交渉を持った。久子を嫌悪しつつも肉体関係が続いた末、久子を妊娠させ

た。郊外の神社で久子に談判を迫られ、「僕」が困り果てる時点で小説は終わっている。

以下では、登場女性と「僕」との相互関係を分析しながら、「僕」の置かれた状況と、その「頹廢」の原因を具体的に考察した上で、小説の主題を探ることとする。

### 1 勝子

マライから復員して帰ってきた「僕」は、「これというきまった仕事ももっていない所在のなさから」、「毎日のように、町の麻雀屋にいりびたっていた」時に、未亡人である勝子と出会う。「僕」より四つ上の彼女は、紛れもなく戦争の被害者である。

鹿児島県大島の生まれで、女学校をでると、両親に連れられて朝鮮にわたり、京城の女子専門学校をでた。役人と結婚し、終戦どき、主人は総督府の課長をしていたのであるが、戦争いらいの過労がたたったのか、肺病で惨めな死にかたをした。そのころでは身よりもなくなっていたので、夫の遺骨をかかえて、夫の郷里である、この暖国の町に引きあげてきた。

音楽と文学の教養もあり、商売の手腕のある勝子は、夫を失った後も、悲しさから立ち上がった。勝子は美術学校出身の「僕」を励まし、献身的に「僕」を愛する。

「……あなたがそんな気になつてさえくだされば、わたしはあなたのために、一生を犠牲にしても、すこしも惜しくないことよ。愛する人のために、自分を犠牲にすることが、女にとつていちばん幸福だと思つて」

「ね、あなたはわたしを利用して、りつばな絵かきさんになれば、それでいいのよ」

「あなたはほんとお金のことなんかにも考えないでいいのよ。いい仕事さえてくださればそれでいいのよ」

しかし、自己を犠牲するまでに、「僕」を愛している勝子は、「僕」と結婚したくても果たせなかつた。その原因の一つは、なくなった夫を心底から愛していることを、「僕」に知られてしまったからである。勝子は、ある夜、夫の遺骨の箱をだきしめて、「まるで子供か、けものの泣き声のように、底なしにもの哀しい、そしていつ終るともしれないような、綿々たる泣き声」をした。彼女の強い性格に覆い隠される、「愛する夫を終戦のどさくさに喪つたその悲しみは、とうぜん深い傷あととして、彼女の胸のなかにのこっている」ので

ある。

勝子は、自分と結婚しようか、やめようかと迷っている。「僕」の態度を蔑んだかのように「あなたのように気の弱い、はつきりしない方が、将校だつたんですものねえ。日本も戦争にまけるはずねえ」と笑いをもらしたこともある。それにもかかわらず、勝子はどうしても「僕」と別れたくない。それは、「僕」への愛情よりも、現実的なことを考えているからである。

「いまの時代に、どうせあたりまえの結婚なんかできない」という現実には迫られ、勝子は「どうせこんな方法でもとらなにかぎり、とても未亡人は結婚できない」という自覚のもと、「僕」を「かわいそう」と思つても「僕」を手離さないのである。

## 2 久子

「僕」をめぐるもう一人の女性久子もまた、「僕」に近づくために、次のように様々な手管を考えたかのように描かれている。

店へくるようになって、一週間もたたないうち、久子は勝子の留守を盗んで、二階の僕の部屋にさがつてきた。

「わたし、あなたにお近づきになりたくて、この店にあらがりましたのよ」(略)

そしてそのうち、どちらからともなしに、体がふれたとき、

「わたし絶対に妊娠しませんわ。わたし不産女ですよ、きつと」

彼女はそうささやいて、僕を安心させ、僕の心をたぐりよせた。

久子は、積極的に「僕」に近づいた。「絶対に妊娠しません」と言つて「僕」を安心させたものの、結局久子は妊娠した。

久子との関係を清算するために約束した神社に赴いた時、「僕」は久子を見つめて、「その芋虫のようにぐんにやりした体を、もっているステッキでつきさしてやりたい」ような衝動に駆り立てられた。しかし、久子は「僕」が自分に好意も持っていないことさえも気づいていないように、ひたすらに「わたしといっしょになつてくださらない……。ね。あなたは勝子さんを、愛してはいらっしゃらないのでしょうか」と勝子と別れることを求め、勝子から「僕」を奪おうとした。

「僕」が勝子を愛していると言つて断わると、今度久子は「お妾さんでもいいわ」と要求し、「あなたの子供を産んで、育ててゆきたいのよ」と告白した。それでも無反応の「僕」

を見て、久子は「ぬらりとした」手を「僕」の膝の上に這わせてきて、「ね、ね。すてないで……。あなたがそうおっしゃれば、墮胎でもなんでもするわ」と再度条件を変えた。しかし、久子を愛していない「僕」は、その手を「はずした」。すると、「腕ぐみしたまま、黙りこくっている僕のかたわらに、にぶい、静かな女のすすり泣きの声が、きこえ始めてきた」。最悪の事態が解決しないまま、「僕」も泥沼に陥つたまま、小説はいきなり終わっている。

もちろん、このように女性たちに求められている男性の描写からは、「僕」の男性としての優越感も読み取れることは否めない。もつとも、本作品においては、この女性たちの「僕」への愛情は、いずれも自分たちが置かれた環境との妥協に基づいて展開したものである。久子の赤裸々な追求はもとより、勝子の一途で献身的な姿さえも計算高く感じられ、疑わしいものである。女性たちの考えの裏側も書き示すことによつて、「僕」と女性たちとの間の泥沼の描写は、描かれれば描かれるほど、敗戦後の地方で暮らしている男女の精神の空虚さが際立つものとなっている。

### 3 マノン

小説の中で、「僕」に唯一将来を夢見させた女性が、マノ

ンである。「女たち」で描かれたマノンには、ピアノもひける、「四肢がのびきっていて締りがある」、「きれいな好き」なインドネシアの女性である。彼女は、戦争中、日本軍を相手にする売春婦として働いていた。

日本軍の「僕」との出会いには、「マレー半島のクアラルンブル」という町の売春窟、軍の慰安所」である。マノンと一緒にいる時だけ、「僕」はいつも戦地軍隊生活の緊張から解放されることができた。「軍隊にあって、いつ死ぬともわからない、つかの間の命にあたえられた、それは言いようのない幸福な瞬間」と感じ、「僕」は現地除隊をしてマノンと一緒にすることさえ夢見ていた。

しかし、その日が永遠に來ないことが明らかになる。マノンは当時南洋で広がっていた「癩」に似た皮膚病に罹ってしまったせいで、店から追い出されたのである。マノンが癩であるという噂を仲間から聞いた瞬間、「僕」のマノンへの愛情は一気に消えうせる。しかも、自分がうつされたかどうか心配でたまらなくなる。

顔から血がひいてゆくのが、僕は自分で、はつきりわかった。熱帯地であるその半島には、そのいやな、いまわしい病気がまんえんしていることを、僕はまえから聞いていた。病気にたいして極度に臆病で、神経質な僕は、

Fのことばをきくと、すでにその病気に感染してしまつたような戦慄をおぼえた。頭をかきむしり、マノンにたいして呪いの言葉をはきかけ、それから自分をわすれるために、どこかにつつ走つてしまいたい、そんないても立ってもいられないような気もちに、かりたてられてくるのであつた。

そして、かつてマノンを争っていた仲間も、自分に内緒でマノンのところに通つていたことを知つて、「僕」は「ばかばかしくてひどにも語れないような、大きな悩みと、悲しみをいだいている仲間を、他に一人もつていることが、救いや、慰めでさえあるような気がした」と正直に告白している。のちほど仲間と連れだつて、マノンの病気を診察した医者から、マノンが罹つたのが癩ではないということ知らされても、マノンの行方をさがそうともせず、それどころか、マノンとそれ以上かわりたくない様子であつた。マノンから見れば、かつて永遠を誓つた「僕」は、自分の不幸な運命をより一層きびしくする一人であらう。

こうして、「女たち」に登場した女性は、いずれも不幸な運命に陥っている。戦前、植民地に赴いたことによつて不幸に陥つた内地の女性への関心は、戦後の地方においては、「トマリ木のない」未亡人に向けられるようになった。当時の類

廢的な社会状況と未亡人への関心は、まさに中村地平の「女たち」執筆の動機であると考えられる。

周知のように、「女たち」の発表当時は、未亡人が激増し、社会の大きな問題にもなっていた。「女たち」を発表した同じ月に、中村地平は「婦人」に「若い未亡人」も発表している。「女たち」よりも短い小品であるが、登場する女性は、夫が南洋で戦死した「雪子」と、戦時中に夫と共に満洲に渡るものの夫がソ連で抑留されて死ぬ「利子」の話である。「女たち」の女性たち同様、戦争に蹂躪され、そして自分だけが生き延びた女性たちである。

## 二

「女たち」を見るかぎり、弱者への関心が基底になっている点においては、戦前作品との違いはそれほど鮮明ではない。中村地平は昭和七年の「熱帯柳の種子」を手始めに、「なさきにて」「花子」などの作品によって、運命に翻弄される不幸な女性たちを次々と取上げた。社会の弱者である女性の不幸を作品の主眼として描くのは、地平の戦前作品も同じである。「女たち」に描かれる不倫妊娠と女性の不幸の運命は、中村地平の地方を描いた戦前作品「花子」から続く、一貫したテーマでもある。「花子」の粗筋は、以下のようである。

——日向の自然で育った花子は、上京してお手伝いさんとして働くが、ある夜、主人に犯された。翌朝、奥さんの援助をもらうことで、花子は仕事をやめ師範学校に進学した。しかし、卒業して小学校の先生になった後、視学の夜の接待を校長にさせられた。帰り道で、花子は「ふと魚臭のような自分の体臭」を嗅ぎあてた。

その後、さらに深刻な悲劇が花子を待っていた。花子は学校の同僚と恋愛関係になるが、一途だったせいも学校中の噂になってしまい、学校から追い出された。その上、恋人は転任させられたことをきっかけに花子と別れた。その後、花子は妊娠していることがわかって、帰郷する決心をした。遠い旅で花子は疲れ果てたが、「赫土の坂をのほりつめると、突然、視界は幅広くひろがって、溪流を挟んだ岸向うの丘や畑の展望が溢れるような太陽をあびて、どっと流れるように花子の眼前へおしよせてきた」。その中に、荒廃した田舎の風景と老いた両親の小さな姿が見えた。——

この粗筋で分かるように、「花子」の不幸は、性的な面にかかわって起こるのである。「欲望がうむ悲劇を、自らは避けたかった花子は、こういう風にして、いつもその意思とは逆に、自分自身が、悲劇のなかになげこまれた。そして、それは花子自身が悲劇と感じている、というだけの理由で悲劇

の性質を帯びている種類のものではあつた。

こうして、欲情にかかわる不倫、妊娠と不幸に陥る人物を取上げた中村地平の作品は、戦前、戦後を問わず存在する。とりわけ、日本の南方女性を描く小説には、不倫、妊娠の筋がしばしば存在する。ところが、東京を舞台にする小説と台湾を舞台にする作品には、この筋が殆ど見えないのである。すなわち、日本の地方の女性を主題にする作品では、不倫、妊娠の運命と女性の不幸に大きな比重が割かれている。「花子」に絡まれる「欲望がうむ悲劇」は、「女たち」の「僕」にも共通するのである。

### 三

この短い小説に登場する勝子と久子、そして「僕」の回想の中で登場するマノン、この三人の女はすべて「僕」と性的関係を持つ女性である。しかし、「僕」は女性と一緒にいれはいるほど、癒されるところか、ますます自己嫌悪に陥る。マノンとの関係は戦場という非日常の条件下で結ばれたものである。売春婦とお客という前提から始まった、この歪められた関係が、愛情のレベルに昇華して「僕」に「至福の瞬間」を感じさせたのは、おそらく戦争という非常事態に迫られていたからこそであろう。したがって、マノンの病気を聞

いた途端、「僕」のマノンに対する愛情も幻影のように消えていった。

マノンが癪であるときいた瞬間、あれほどの愛情が消えうせ、夜もねむれないほどに、動揺せねばならなかつたその浅薄さ。空想に描いたマノンとの土人部落での生活の、なんとという通俗な文学趣味。それから死を覚悟していたはずの軍人の、滑稽なくらいな生への執着。自分の精神の浅さと甘さとを、あますところなく見せつけられたマノンの想い出は、その後いやな、たまらない自己嫌悪の念をとまなつて、いつまでも僕の念頭に浮かぶのがいつもであつた。そして、それは復員して、日本にかえつたのちもおなじであつた。

そして、「日々献身的な」勝子に向かい合つて、「女にやしなわれている男」の自己嫌悪を強いられる。しかし、勝子がどんなに献身しても、「女を愛する気になれないのは、やはり前とおなじであつた」。このうつつとういしい自己嫌悪の感情のはけ口を凶らせるように、「そういう艶のない、希望をうしなつた、僕の眼のなかに、とつせん久子という女が、その大柄な姿を現したのであつた」。「僕」は罪深い自分を懲罰するように、久子と体の交渉をもつた。



久子との体の交渉に、僕はなんのよろこびもかんじなかった。むしろそれどころか、いやな、たまらない不愉快なものさえかんじていた。そしてもし、彼女との間に、強いてなんらか、快感に近いものをさがし出そうとすれば、それは自己汚辱の快感であると言つてよかつた。シンガポールでの敗戦の日から、こんにちまでつづいてる生の恥辱。女にやしなわれている男の自己嫌悪。そういう自分の精神を、僕は「これでもか、これでもか」というふうな、彼女の肉体を辱かしめることで、辱かしめてきたのである。そしてその報いが、いま妊娠という形で自分にまい戻ってきたとしても、これにたいして、僕がなんの異議をとなえることができよう。

作品における、久子の一方的な押し付けがましい態度から、「僕」と「久子」との根本的に食違ふ距離の存在が明らかにされる。「僕」と別次元にいるかのような、繊細さのかけらもない女性、久子との肉体関係は、「僕」にとつてすこしも本能的な快楽ではなく、ただ精神的な「自己汚辱の快感」でしかなかった。「僕」の「ふつうではなかつた」欲情は、精神的な自虐意識を内包しているのであろう。

この自虐的な意識は「僕」の自己嫌悪の感情に起因し、「シンガポールでの敗戦の日から、こんにちまでつづいてる生の

恥辱」と表裏一体のようなものであり、日本の敗戦によつて背負われた精神的な傷にほかならなかつた。繰り返しになるが、敗戦の日から積み重ねた「自己嫌悪」と「生の恥辱」に、「僕」はもうどうしようもない袋小路に追いつめられたのである。

#### 四

精神が空虚な、不幸な人々の話を主軸にする「女たち」の結末は、読者に知らされないままに終わった。小説の終わった時点から見ると、「僕」と愛し合つた結果、結婚できたり、あるいは「家」を持つに至つた女性は一人もいない。当時の一般的通念である結婚、家庭を持つところ、つまりハッピーエンドで終わっていない。勝子にとつて「僕」と久子との浮気は、主人と女中との浮気であるように描かれているものの、小説の始まりから終わりまで、「僕」も「女たち」もすべて家庭的な繋がりを持たない、個々の孤独な状態である。いままで見てきたように、「僕」と勝子、久子との交際には、愛情の存在も疑わしく、戦後の空虚で退廃的な雰囲気にも満ちている。登場人物の女性を不幸にする「僕」は、加害者としての罪を背負いながらも、戦争の被害者としての姿によつて造型されている。戦争から復員したばかりの僕は、次のように「痴呆のような精神状態」で、心が空虚だつた。

そのころ、僕は頭がほんやりして、まるで気力というものがなかった。マライに三年ちかく、歩兵中尉として駐屯していたために、いわゆる熱帯ぼけになっていたせいもあるかもしれない。あるいはまた、空爆のために、変わりはたふる里の町にかえってきたものの、べつだん身内があるではなし、それに職業がら、田舎町ではすぐ身をたてる方法もない。将来にも希望がもてなかつたりして、心が空虚だったせいもあるかもしれない。

以上の所々に作者は戦争の後遺症、つまり戦争の傷痕を表そうとしている。人を愛する能力を失った「僕」は、敗戦によつて精神的な傷を背負った一人に違いない。したがつて、この小説の主眼は、戦争によつてもたらされた精神的な荒廃と、不幸な人々の描写にあると言えるのではなからうか。

そして、この小説では、もう一つ潜在する主題があると考えられる。すなわち、この空虚の精神状態をもとに成り行きのように結びついた、「僕」の勝子、及び久子との関係が、作者によつていずれも欲望に絡まれる泥沼の悲劇のように描かれていることである。

## 五

「欲情がもたらす悲劇」というものが、逆転して「悲劇がもたらす欲情」になり、「僕」の身に悪循環を繰り返している。「悲劇は人間を欲情的にする」ことについて、「僕」は学生時代にすでに経験がある。「T元帥」の「国葬」に立ち会つて、「喪服を着て、薄化粧をし、悲しみにぬれているそれらの女たち」を見て、「僕の欲情はそりたてられていた」のであつた。そして、他人の悲劇のみならず、自分と勝子の関係は一つの悲劇だと認識し、この「悲劇のなかに在つて」、僕の「欲情はふつうではなかつた」。

作中においての愛欲関係は、女性側はともあれ、男性側の「僕」にとつては、愛情が欠けていることが明らかである。欲情しか感じていないにもかかわらず、日々続けていく男女関係は、「僕」にとつて「悲劇」のようなものである。

愛し得ない男女が、同棲生活をつづけていることを悲劇といひ得るなら、僕と勝子との場合も、またたしかに悲劇的であつた。そして、その悲劇のなかに在つて、僕の欲情はふつうではなかつた。すなわち僕は、愛していない勝子との生活のなかに、さらに愛していない久子と体の交渉をもつたのである。

この「欲情」は、悲劇と絡み合っているものであり、おそらく普通の性的なものと異なり、一種やむにやまれず性的關係を持つことを指すのであろう。そして、「愛し得ない男女」の悲劇に、この「欲情」が介在することによって、「家」の成立や、それに関わる子供の存在も許容されなくなるということは、最後に至って、久子が「墮胎する」という話を言い出した時点で明らかになる。

勝子の眼を盗んで浮気した「僕」と久子との交際も不倫の關係である。「勝子さんわたしたちのことを知ってらっしゃるかしら……。勝子さんわたしにんだか皮肉めかしておっしゃいましたわ。ふつうの家庭では、浮気しているときは、旦那さんは奥さんにやさしいもんだけど、うちのはそんなとき、かえってわたしにつらくあたるんだから、やりきれないって……」という言葉で、久子は不安を漏らしている。

不倫の關係は始まった時点から、いつかばれるだろうと緊張しながら不安を感じる關係ともいえよう。そして、この不倫は自己消滅しない限り、露見する日を、一種の運命的な決着として待ちながら続くのである。「僕」の不倫相手としての久子の妊娠は、この不倫の悪徳の報いとして訪れた。

とっさに、僕はそう思った。ながい間、僕がおそれていた時。三十二歳のこんにちまで、いかにも誠実そうな仮

面をかぶりながら、蔭では人知れず悪徳をつみかさねてきている——その仮面がひんむかれて、世間から袋だたきにされる時。ほんとうにその時がやってきたのだ、と僕はそう思った。

心が空虚である日々、空洞化される精神、すがりあう人々、そして自分の「誠実そうな仮面」がはぎ取られる不安、これが「僕」の悲劇であり、「女たち」の不幸にも結びつくものである。戦前作品では不幸なのは女性ばかりであり、男性主人公は不幸な女性を見て同情を感じる。ところが、戦後作品では、自分に対する男性の心理描写が深く書き込まれ、女性のみならず、女性を不幸にさせた男性も不幸に陥っている様子が描かれているのである。これはまず、戦前作品と戦後作品との違いの一つであらう。

さらに、不幸の女性描写というテーマが共通しているとはいえ、作品を分析していくと、小説の中の「女たち」との關係は、けっして「僕」にとって愉快なことではないことが明らかにになる。自身の「青春」を描く小説にしては、あまりにもトーンが暗すぎるのである。戦前の青春を描いた小説「熱帯柳の種子」の感性の代わりに、「欲情」にかかわって見逃すことができないほどの自己嫌悪の感情が、不幸な女性への同情と嫌悪と共に存在して作品全編に漂っている。

「女たち」に描かれた「僕」は、女性との不倫関係によつて、嫌でも「欲情」と「悲劇」の悪循環に陥つてしまい、救いのない話となつている。地方の女性の身に起こる不倫と妊娠の運命は、彼女らの南方的な性格にかかわり、不幸をもたらずと同時に、彼女たちのたくましさをも明らかにする。この筋は、戦前と戦後作品とに大別してみた場合、異なつた効果を生み出している。戦前作品には、不倫と妊娠に寛容な態度を取っている人々、すなわち男性によつて、一つの暖かい南方的世界像が描き出されている。だが、戦後作品では、女性と不倫し妊娠させたことは、男性にとつて悲劇のように描かれ、戦後の作品を自虐的な色調に染めているのである。

戦前作品「花子」のほか、「もぐらどもぼっくり」「南方郵便」も不倫、妊娠の話であり、悲劇ではあるものの、作品全体は「南方」の楽天的な、暖かい世界に包容されている。性的な欲望に絡まれ、不幸の運命が次々と身の上を起こつても、妊娠した身でひとり未知の将来と向かい合おうとする、たくましい姿が「花子」の結末でも描かれている。

それに対して、戦後の地方を描く作品群には、地方の女性のたくましさは依然として存在しているものの、戦前作品の暖かい世界が反転し、暗い色合いとなつている。「女たち」

における久子の妊娠は、男性の方が少ない終戦直後の状況で、身の回りにいる男性を確保するための手段となる。戦後の退廃的な世相に付随して、図太いほどの女性像が鮮明に浮き彫りにされているといえる。

登場人物の久子と勝子の特徴からは、中村地平の地方、そして地方の女性に対する観念を明瞭に察することができる。未亡人としての勝子、「僕」に絡む久子、それらの女性の姿に存在する「南方」女性の独特のたくましさと性的な開放性は、戦前作品から一貫したものであるが、戦後作品の「たくましさ」は、一種の無神経さや、図々しさを帯びて、「僕」に強制的に押しつけられ、悲劇的な運命の象徴になる。

すなわち、「僕」に絡む女性たちの表象は、戦前の台湾作品における女性と比べて、負のイメージを大きく持たされているのである。これは、内地を描いた戦前作品では、日本の地方女性が性的醜聞にかかわつてもあつげらんとしていた様を描きつづけた地平が、戦後は、同情に伴う嫌悪感、不潔感の潜在意識をもあわせて表現するようになったためだと考えられる。むろん、そこには敗戦が影を落としている。戦後作品「山の中の古い池」における、河童との不倫もまた同じ性質のものである。自虐に近い不倫関係は、「僕」の精神的な荒廃に起因するものであり、「僕」の精神的な荒廃の原因は、まさに敗戦にあるのである。

戦後の十年間、中村地平は東京文壇へ寄稿を続けた。それらの小説の大半は地方を舞台とし、戦後の女性を主題にしており、中村地平が地方の庶民生活を意識して執筆したものである。「女たち」全編に流れている戦争に傷ついた青年の心境と、敗戦と「欲情」がもたらす多層的な悲劇の描写は、まさに昭和三十年の「山の中の古い池」と共通するものであり、中村地平の戦後作品の大きなテーマとなったのである。

注

- 1 洪川驍「中村地平」(『日本近代文学大事典』、一九七七年十一月、五三七頁)。
- 2 長嶺宏「中村地平」(『逍遙・隲外論考』、風間書房、一九七五年八月、二二二頁、初出「竜舌蘭」一九六三年十一月)。
- 3 浅見淵「解説」(『中村地平全集』第二巻、一九七一年九月、四八七頁)。
- 4 昭和二十三年一月、中村地平は結核にかかって咯血して、二年間静養せざるを得なかった。
- 5 浅見淵「解説」(『中村地平全集』第二巻、一九七一年九月、四九〇頁)。
- 6 興梠秀樹「中村地平小説集」(鈺脈社、一九九七年一月、四六三頁)。
- 7 ハンセン病のこと。戦時中、南洋群島のバラオなどにもハンセン病収容所が建てられた。

8 「花子」をはじめ、昭和十二年五月の「もぐらどもぼっくり」、昭和十三年四月の「南方郵便」など、戦前の内地を描く作品群にはすべて女性が不倫か未婚妊娠という、性的醜聞の話がある。そして、戦後昭和二十二年四月の「義妹」、昭和二十三年三月の「女たち」、昭和三十年一月の「山の中の古い池」など、戦後の地方女性を描く作品群にも、この主題が受け継がれている。なお、「花子」は初出誌不詳であるが、昭和十二年はじめに執筆した可能性が高い。

9 主な作品における女主人公の不倫・妊娠をめぐる関係表

発表年月	作品名	初出誌	主人公	女の主人公	舞台	妊娠 不倫話
昭和七年一月	熱帯柳の種子	「作品」	私	細君目 アチャウ	台湾	無
昭和八年一月	南海の紀	「四人」	僕	奥さん	台湾	無
昭和九年五月	旅さきにて	「行動」	僕	お俊	台湾	無
昭和十一年九月	イルゼとその母	「日本浪漫派」	僕	マダモ ラリス	東京	無
不明	花子	「熱帯柳の種子」 単行本		花子	(日向) (宮崎)	有
昭和十二年五月	もぐらどもぼっくり	「日本浪漫派」	伝吉	稲	(日向) (宮崎)	有
昭和十三年四月	南方郵便	「文学界」	源吉翁 さん	お浜	(日向) (宮崎)	有
昭和十三年八月	陽なた丘の少女	「新潮」	(私)	秋子	東京	無
昭和十四年九月	蕃界の女	「文芸」	三吉	イワル	台湾	無
昭和十九年三月	支那娘ジン	「マライの人たち」 単行本	西田	ジン	マライ	無

昭和二十二年四月	義妹	〔座右宝〕	謙一	スギ	田舎町 (宮崎)	有
昭和二十二年九月	女主人	〔世代〕		邦子	東京	無
昭和二十三年三月	女たち	〔中央公論〕	僕	勝子(貞) 久子(貞) マシイ	暖国の町 (宮崎)	有
昭和二十三年三月	若い未亡人	〔婦人〕		利雪子	日向 (宮崎)	無
昭和三十年一月	山の中の古い池	〔群像〕	地平	河童	宮崎	有